

ふと空を見上げた。

薄い水色に所々雲が浮いて、その間を縫うように鳥が飛んでいる。なんの変哲もない風景。コンビニの袋の中では、僕の大好物であるプリンが揺れている。嗚呼、今日は日曜日。なにも考えず、のんびりしていられる日。毎週、日曜日になると嬉しさの反面、この天国がなくなることを考え嫌になる。

「もう、月曜日なんて来なくていいよ」

なんて馬鹿なことを言いながら、軽い足取りで家路に向かった。

カチャカチャといわせながら鍵を取り出し、鍵穴に差し込んだ。「ただいま」

その一言とともにドアを開けて靴を脱ぐ。そこでふと、母の返事がないことに気づく。いつも律儀な母は、挨拶を返してくれるというのに。もしかして出かけているのだろうか。そう結論づけると、僕は冷蔵庫にプリンをしまうためにリビングへと向かう。

なんだか、リビングが騒がしいな。テレビでもつけっぱなしにしているのだろうか。ドアを開け、リビングに入ると案の定テレビがついている。

「やっぱり…、母さんなにやって…」

母さんはキッチンで立ち尽くしていた。水道の水が出しっぱなしである。

「母さん？いったいどうし…」

その言葉は最後まで発せられることはなかった。

テレビの向こう側、それは静かに、けれども確かな声で発せられた。

「…繰り返します。あと一年で地球は滅びます」

それは、あまりにも突然だった。どこかの国の天文学者が、地球に向かってくる巨大な隕石を発見したと。

最初は小さな隕石だったそう。さほど大きくもない隕石は自然に消滅するだろうと気にもとめていなかったらしい。しかし、その進路中、他の小さな隕石と次々にぶつかってくつつき、大きな隕石となった。地球を林檎とするならば、野球ボールほどの大きさ。その進路は、他の隕石とぶつかったことにより、より正確に地球へ向かってきているそう。

タイムリミットはたった一年。そんな短期間に、安全かつ確実な解決策など人類が見いだせるはずがなかった。

…

この半年はやけに早かった。滅亡、という言葉に最初はともうろたえていたものだが、それも日常になってしまった。そんなふうには僕は割り切れたし、死ぬときはみんな一緒なら、怖いと言うほどでもなかった。でも、みんながみんなそういうわけにはいかず、変わっていった人たちがいた。確定されてしまった死を紛らわすように、

神様に継ぐ人。どうせ死ぬのだからとやけになり犯罪に手を染める人。自殺件数も、過去最大を記録していた。

もう一つ、別の意味で変わった人たちがいた。世界の偉い人たち。つまり、大統領だとか王様だとかそういう人たちである。彼らは、今までのいざこざが嘘のように手を取り、解決策を練り始めた。世界中の科学者、知識人を片端からかき集め、半年とちよつとかかつて、ようやく解決策といえるものにたどり着いた。

それはまあ、いわゆる人柱のようなもので、人が操縦する宇宙船に爆弾を取り付け隕石にぶつける、というものだった。当然反対の人もなくさんざんいたのだが、こんな短時間で作れるような宇宙船はなく、既存の物しかない。その整備だって時間がかかるのだ。この方法しかないと言われ退けられた。

ここで一つ問題が残った。そんな死に行くようなことをだれがするのだろうか？自分から手を上げるような人などだれもないのではないか？

そう考えた国の偉い人たちは、国籍や職業関係なくランダムで一人選ぶことにした。もしかしたなら、自己犠牲というやつで自ら手を上げる人いたのかもしれない。

だけど、今となってはそんなことどうだっていいのだ。だって、この僕が選ばれてしまったのだから。

本当に突然だった。隕石が落ちてくると聞いたとき、これ以上ないほど驚いたと思っていたのだけど、それ以上の衝撃だった。「国か

らあなたの死後親族に手当が出ます」、「世界のためです」と言い訳がましくつづられた手紙は、「一週間後に迎えに来ます」と締めくくられていた。嫌な予感がしたのだろう。僕からひったくるように手紙をとった母さんは、それを読むと膝から崩れ落ちて泣いてしまった。いつも冷静な父さんでさえ酷く取り乱した。そんな中、僕は一人茫然としていた。

この一週間僕は、人の目から逃れることができなかった。家の中にいけば、家族の悲しげな瞳が僕をとらえて離さない。また外に出れば「頑張ってきてくれ」と声をかけられる。仕事はもう辞めてしまった。

一体、僕は何を頑張らなければならぬのだろうか。みんなのためにこの命を捨てることだろうか。なんの決定権もなしに、今までの僕の人生が壊れるのがどうしようもなく嫌だ。僕は眠れず、布団にくるまりじつと朝が来るのを待った。たった一人で宇宙に出て、隕石にぶつかる。そのときの瞬間は、やはり痛いのだろうか？

僕が死んだ後も、世界は続く。当たり前を繰り返して行くのだ。みんなと一緒に訪れると思った死は、僕一人に降りかかる。隕石がなくなったことに世界の人々は喜ぶだろう。僕が犠牲になったことを喜ぶだろう。

頬を温かい涙が伝う。いつの間にかまぶたは閉じていた。

……

一週間なんてあっという間に過ぎてしまった。

ずいぶんと早い時間ということもあって、かすかに夜の香りが残る朝。朝食を作る母さんの背中と新聞を読む父さんの姿が、どこことなく寂しげなのは気のせいではないだろう。プロロロと低いエンジン音がして家の前に停まったのがわかる。外でピカピカの黒い車が僕を待っている中、玄関の前で母さんは僕をそっと抱きしめた。そうして泣きそうな声で「行ってらっしゃい」と声をかけてくれた。

僕は二人が「自分が変わりに」と申し出るのを最後まで期待していた。

車で目的地に向かった後、これまた黒いスーツに身を包んだ男の人に説明をされた。五日間、訓練をおこなった後出発することらしい。また、操縦のことは心配しなくていいが、爆弾の起動は僕自身が下さなければならぬのだという。正直、操縦のことは心配していたのでほっとした。

「今回の計画はあなたの精神的な負担が大きいと判断されました。…ですので、まだ試作段階ではありますがこちらをお渡ししておきます。」

そう言って渡されたのは、小型のタブレットだった。

「電源を入れてみてください」

言われた通りに電源をつけると、起動の音とともに長い黒髪に白ワンピースの少女が画面に現れた。全アニメオタクの夢が叶った瞬間だと思った。

「メンタルカウンセラーを搭載した最新の人工知能です。システムの管理や、宇宙船の運転なども、ある程度自動でしてくれます。分からないことがあったら、この人工知能に聞いてください」それでは失礼しますと、呆然としている僕をよそに、彼はさっさと部屋から出て行ってしまった。人工知能なんてものがあるなら、全部それに任せてしまえばいいのに。これですます僕が死ぬ必要性があるのかわからなくなった。

「えっと、とりあえずよろしく願いします？」

『はい。よろしく願いします、マスター』

その後、五日間を過ごす寝室に案内された。今日はもう休んでいとの言葉をいただき、ベットのの上に倒れ込む。実感がわかずぼうっとしていると、ふいに人工知能の彼女のことを頭をよぎった。少し考えてからタブレットの電源をつける。すると、先ほどと同じように少女が現れた。

『何かご用でしょうかマスター』

僕は少し考えて答える。

「少し聞きたいことがあるんですが…」

『私に答えられることなら、何なりと』

彼女はにっこりと微笑んだ。

「まず、一つ。あなたとの会話は他の人に伝わったりしませんか？」この質問に彼女は不思議そうにしながらも答える。

『はい。プライベートの保護のためにも決して伝わるようなことはありません。…ですが、どうしてそんなことをお聞きになるのですか？』

「簡単ですよ。聞かれないからです。では次の質問、いいですか？」

『はい』

彼女は納得のいっていない顔で頷いた。

「次に、あなたはどこまで宇宙船を操れますか？」

『ほとんどと言っても過言ではありません。』

なるほどと一人頷く。

「最後に、あなたは私の味方、ですか？」

一番聞きたかったのはこれなのだ。真剣な顔をして尋ねる。

すると彼女は、人工智能だとは思えないほどの慈愛に満ちた笑顔で答えた。

『あなたをマスターと認識した瞬間から、私はあなたの味方です』

「…ありがとうございます」

『ふふっ、それでは失礼しますね』

彼女は最後にまた笑ってみせるとくるりと回ってみせると、画面の奥に消えていった。

長いように思えた五日間も、彼女と話しているとすぐに過ぎ去った。一番驚いたことといえば、人工智能である彼女には感情があるということだった。

夜遅くまで質問攻めしたり、無理なお願いをして彼女を困らせてしまったりもしたが、彼女と会話することでたかさんの訓練や退屈な説明も乗り切れた。それでも敬語は抜けなかったのは僕の女性経験からしてお察しである。

いつの間にか、ここに来るまでの不安は嘘のように小さくなっていく。案外メンタルカウンセラーの機能も役立っていたのかもしれない。

………

案内された宇宙船の中はたかさんのスイッチやらレバーやらがついていて、押したいという気持ちをくすぐられた。

「昨日も確認した通り、すべての操作は人工智能が行います。くれぐれも触れないようにお願いしますね」

思っていたことを当てられて、ぎくりとしてしまう。

「それと、この前おっしゃっていた物資はこちらの方に積んでいます」

「すみません、無理を言ってしまった」

「いえ、むしろわがままを言ってもらった方がこちらとしても気が楽になります」

そう言って愁いを帯びた瞳をそっと閉じた。初めて会ったときとの印象とは大きく違っている。顔に出さず驚いていると、彼はまた事務的な声で話し始めた。

「それにしても多いですね。二三日でこんなに食べられますか？」

「はい。多分大丈夫だと思います」

「そうですか。なら、問題ありません」

ご武運を、と言って彼は退室してしまう。待つ間が暇になってしまつて、なんとなく宇宙船の窓の外を見たが、その景色が作り物のように思えたのはなぜだろうか。

強い振動と、耳が壊れそうなほどの轟音。それらはすべて、広大な闇に吸い取られるようになってなくなった。

『マスター、宇宙空間に到達しました』

「すごかった…」

初めての体験に語彙力なんて溶けてしまった。放心状態で座っていると機械の画面に、彼女の姿が映る。

『マスター、大丈夫ですか？』

「大丈夫です、多分」

『宇宙服はもう脱いでいただいてもかまいません』

その言葉に、心の中で喜びながらいそいそと宇宙服を脱いでいく。なんせ、とつても着心地が悪かったのだ。

………

すつとスプーンを入れると、黄色く輝くプリンがふわりと宙に浮いた。飛びつくように飲み込むと、バニラの香りが口中に広がった。無理を言って物資の中に入れてもらったのだが、やっぱり正解だったな。プリンの味を堪能していると、彼女が静かな声で言った。

『マスターはとても冷静ですね』

「そうですかね？」

僕は何でもない風に答える。

『今から死んでしまうんですよ』

「そうですね。…ですか、人はいつか死んでしまうもの、死は等しいものですから」

『ですが、覚悟なんて、とてもできてはいないのでないですか？』

彼女の悲しそうな声に笑って応える。

「…行きましょうか」

『っ、はい』

宇宙船はゆっくりと機体を傾けると、静かに前進した。黒い空間を、裂くようにして進む。その間中僕も、彼女も一言も発しはしなかった。

「もうそろそろですね」

『はい』

僕は目を閉じると、ゆっくりカウントを始めた。

「5、…4、…3、…2、…1、ゼロ」

鋭い衝撃波に身を縮ませながら必死に耐える。

嗚呼、これで終わる。すべてが、あの日常が、僕が築いた日々が。たった今、全人類の懇願と僕自身の決断によりなくなろうとしているのだ。これで、これで永遠にさようならだ。

最後まで耳元で鳴り続ける通知音が、悲痛な叫び声のようにこだましていた。

.....

先週あたりから鳴りやまなかった通知音が、ぴたりとやんだ。窓の外の遠く。青い星が輝いていたはずの場所には、ごつごつとした岩の破片しか残っていない。

『あなたは本当に、本当に世界を裏切ってしまったのですね』

画面の中の彼女が、悲しそうな声で嘆いている。

『あなたは、この宇宙で一人取り残されてしまった』

彼女はそれっきり黙り込んでしまった。

「…僕は、一人取り残されたわけではないですよ。一人取り残ったんです。そうあくまで僕はこの未来を自分で選んだにすぎない。

まるで、一時の悪意で行ったかのように言わないでほしいんです。」

『ですが…』

「僕の選択が正しいかなどどうでもいいこと。善悪なんて人の間で取り決められた、共通のフィクションでしかない」

そう、僕は僕自身の選択で世界を裏切った。そして、自分がほんの少し長く生きることを選んだ。一人を見捨て多くを助ける。単純な損得勘定と、自己犠牲という道徳心。当たり前のことだと思っ、みんな僕を信用しすぎたのだ。船を操作できる人工知能の彼女も、たくさんの物資も。僕なんかを信用しないで渡さなければよかったのに。

「それに、僕にはあなたがいるじゃないですか」

僕の言葉に、彼女はどんな顔をしていたらうか。

.....

砕けた地球の破片と隕石の破片が、くるくる回って新しい形を作ろうとしている。すべてを裏切った僕も、日に日に弱っていく人工知能の彼女も、そして最後の一個になったプリンも、宇宙を漂い続けている。

僕らは世界の終焉から取り残ってしまった。

それでも、こんなに幸せだと思えるのは、きっと僕が人間だからだろう。